

説教題 「イエスと悪霊」

聖書箇所

マタイによる福音書 8 章 28 節—34 節

「イエスが向こう岸のガダラ人の地方に着かれると、悪霊に取りつかれた者が二人、墓場から出てイエスのところにやって来た。二人は非常に狂暴で、だれもその辺りの道を通れないほどであった。突然、彼らは叫んだ。『神の子、かまわないでくれ。まだ、その時ではないのにここに来て、我々を苦しめるのか。』はるかかなたで多くの豚の群れがえさをあさっていた。そこで、悪霊どもはイエスに、『我々を追い出すのなら、あの豚の中にやってくれ』と願った。イエスが、『行け』と言われると、悪霊どもは二人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れはみな崖を下って湖になだれ込み、水の中で死んだ。豚飼いたちは逃げ出し、町に行き、悪霊に取りつかれた者のことなど一切を知らせた。すると、町中の者がイエスに会おうとしてやって来た。そして、イエスを見ると、その地方から出て行ってもらいたいと言った。」

ある年の正月に、中国からの留学生だった卒業生から年賀状をもらいました。年賀状には豚の絵が書いてありました。その豚の意味するところは、富裕なる幸福ということだそうです。特にその年は60年に一度の特別に幸運な豚年だったのです。豚が富裕の象徴であるのは、何も中国や韓国に限ったことではありません。本日、私たちが読もうとしている「ガダラの豚」のお話においても、豚は富裕そのものを表しています。

さて、豚飼いたちが町に行き、悪霊に取りつかれた者のことなど一切を町の人々に知らせた時、どうしてこの町中の人々は悪霊に取りつかれた人を救った「イエスを見ると、その地方から出て行ってもらいたいと言った」のでしょうか。それは、多分、町の人々にとって悪霊に取りつかれた人が救われることなどどうでもよくて、それより何より問題なのは自分たちが

豚を失うという大損をすることだったということでしょう。そして、この町中の人々こそ、この場の私たちのほとんどすべてのことではないでしょうか。しかし、私たちはイエス・キリストに「出て行ってもらいたい」などと言っておれほど大丈夫でしょうか。

実は、私たちこそ、むしろガダラの悪霊に取り付かれた二人の人の一人ではないでしょうか。少なくとも私にはそう思えます。私は私に取り付きがちな悪霊に、何とかして出て行ってもらわねばなりません。

あの豚の絵を書いた年賀状を教え子からもらった年の正月のニュースに悲惨なものがありました。自分が無能だと妹からなじられて、狂ったようになって妹を殺し、その死体をばらばらに切り離した21歳の予備校生の事件は皆様も覚えておられるのではないのでしょうか。彼は歯医者の子でした。あの妹さんは言うてはならないことを言ってしまったのかもしれない。皆様はあの事件の報道に接して、他人事と思われたでしょうか。正直申して、私には他人事とは思えませんでした。もしあの予備校生が悪霊に取りつかれた者だと言うとしたら、私もまた同じように悪霊に取りつかれた者だと告白せざるを得ません。川端康成か誰かの、次のような言葉を思い出します。曰く、「生きている人間ほど恐ろしいものはない。次の瞬間、何をしでかすかわたらないからだ。その点、歴史上の人物はもう死んでしまっているからその人について安心して書くことができる」。もしこの言葉を言ったのが川端康成だとしたら、この言葉通り、康成自身がガスを加えて自殺して私たちを驚かせました。しかし、もし私の思い違いだったらお許しください。ともかく、確かに人間が次の瞬間、何をしでかすかわからないというのは、一面の真理でしょう。そして、何をしでかすかわからない人間は、本日のテキストのガダラの悪霊に取りつかれた人間です。だからこそ、そのような人間の最たるものである私は常にイエス・キリストに縋りつき、私に取りついてる悪霊を豚の中にぶち込んでいただけのならば、それはこの上ない幸いです。そこにしか、私の救いはありません。

それにしても、私の救いのためには何と大いなる犠牲が必要なことでしょうか。もう一度本日のテキストを読んでください。たった二人の者に取りついた悪霊を追い出すために、「多くの豚の群れ」が水の中で死ぬ必要があったのです。マルコによる福音書の並行記事では豚の数は2000匹ほどだったと言います。しかし、たとえそのような損失を豚を飼っている人々に与えようとも、私はイエス・キリストに救っていただかないわけには参りません。豚を飼っている人々には本当に申し訳ありませんが、私は救

わりたいのです。あの妹を切り刻んだ予備校生は、この社会がどんな犠牲を払っても救われねばなりません。彼が救われなくてよいはずがありません。では、彼に取りついた現代の悪霊を、イエス・キリストはこの現代日本のどんな豚に入れて滅ぼしたまうのでしょうか。私は、その悪霊の最たるものは、たとえば「学歴偏重主義」ではないかと思います。そして現代の豚とは「学歴偏重主義社会」ではないかと思います。私は最近、1975年11月号の『太陽』という雑誌を読み返してみました。その中に筒井康隆という作家が「学歴偏重時代」と題した一文を書いていました。その冒頭に曰く、

「ある作家が日本一の大新聞、すなわち朝日新聞の記者と一緒に旅行をした。車中たまたま作家が記者に訪ねた。『あなたは出身校はどこですか』。そう言ったとたん、その若い記者は色をなしたという。『東大に決まっているじゃありませんか』というのである。……。朝日新聞社にこういった若い記者がふえているということは、朝日新聞社にそういう体質があるということ以外に、日本一の大新聞社である故に世間的な常識を持たぬ東大出身者、いわば学歴偏重時代の落とし子が集まってしまったともいえる。こういう連中もやっぱり被害者なのである」。

これは36年も前の文章です。しかし、「学歴偏重主義社会」という豚はますます肥え太っています。先程も触れましたあの妹を切り刻んだ予備校生こそ、そのような学歴偏重主義社会の犠牲者に違いないでしょう。そればかりでなく、豚年に象徴される富裕第一主義社会の犠牲者だとも言えるでしょう。彼は、何としても歯医者にならなければならなかったのです。彼の家では、彼の生きる道はそれしかなかったのかもしれない。ことはあの予備校生に限りません。今こうしている間にも、学歴偏重主義や富裕第一主義という悪霊に取りつかれて苛まれている人々の「助けてくれーっ」という叫び声が聞こえてくるかのようです。

もう一度申します。何としても今申してきたような悪霊をイエス・キリストに追い出していただかなければ、私は一日たりとも生きて行けません。私の救いのことなど何の関係もないと思っている町中の人々は「イエスを見ると、その地方から出て行ってもらいたいと言」うかもしれませんが、私はイエス・キリストにこの町から出て行ってもらっては困ります。私は、この町にいつもイエス・キリストに留まり続けていただきたいのです。何故なら、この町には悪霊が満ち満ちているからです。

では、私やあなたに取りついている悪霊が出て行くと、私やあなたはどう

なるのでしょうか。悪霊が出ていった世界の一端を示してくれていると思われる詩をご紹介致します。木山捷平という詩人で作家であった方の詩です。この人について、ある百科事典には次のようにあります。「木山捷平(きやましょうへい)、1904年3月26日生まれ。1968年8月23日没。岡山県小田郡新山村(現在の笠岡市)出身の小説家、詩人。私小説の代表的作家の一人である。短編小説を得意とした」。さらにこの百科事典には、この作家が太宰治や井伏鱒二と交わりのあった人で、芥川賞や直木賞の候補に何度もなったということなどが紹介されています。その木山捷平(きやましょうへい)に恐ろしいタイトルの詩集があります。1931年に出版された彼の二冊目の詩集で、『メクラとチンバ(原作のまま)』と題されていました。現代では、とてもつけることのできないタイトルです。そこでお断りするのですが、これは1904年の木山捷平が紛れも無く書いた詩集でありまして、歴史的に重要と思いますので問題はもちろんありますが、それを承知で「メクラ」とか「チンバ」という言葉を、そのままにしてご紹介させていただきます。詩集の題と同じ題の詩をご紹介します。「メクラとチンバ(原作のまま)」 木山捷平 (以下、メクラ、及びチンバという言葉が出てくる時は全て「原作のまま」です)

「お咲はチンバだった / チンバでも / 尻をはしょって桑の葉を摘んだり / 泥だらけになって田の草を取ったりした。

二十七の秋 / ひょっくり嫁入先が見つかった。

お咲はチンバをひきひき / 但馬から丹後へー / 岩屋峠を越えてお嫁に行った。

丹後の宮津では / メクラの男が待ってゐた。 / 男は三十八だった。

どちらも貧乏な生ひ立ちだった。 / 二人はかたく抱き合ってた。」

ここには、「学歴偏重主義」や「富裕第一主義」という悪霊から開放されている人の姿があります。この詩は、愛し合って「かたく抱き合ってたね」ことができる幸いは、学歴や富裕とは何の関係もないということを教えてくれています。ここには、学歴偏重主義や富裕第一主義という現代の代表的な悪霊から自由な世界があると言えるでしょう。

祈り 神様、私達に取り付いている現代の悪霊を現代の豚の群れに入らせて、溺れ死なせて、私達を救ってください。この祈り、主イエス・キリストのみ名によって御前にお捧げ致します。アーメン。

